論文審査の結果の要旨

氏名　　デリューギン・ヴァレリー

本論文は、紀元前 2 千年紀中葉〜紀元後 2 千年紀前葉にかけて、ロシア極東のアムール川流域から、北海道を含む環オホーツク海にかけて展開した考古学的諸文化の成立と展開およびその相互関係を、土器製作技術・文様分析を中心とした物質文化の詳細な解析に基づいて、その複雑な文化動態を読み解き、さらにその文化変容の背景に、当該地域に展開する多様な自然環境の変異に基づく生業転換等の適応過程を透写した上で、現住少数民族に至るエスニック・プロセスの仮説を提示した完成度の高い独創的かつ意欲的な研究である。

本論文は、3 部構成をとり、時代を追って記述と分析が行われている。第 I 部の各章では、当該地域の初期鉄器時代について、アムール中流域・下流域・河口部・間宮海峡西岸・サハリン・オホーツク海北西沿岸といった文化圏ごとに、代表的な遺跡出土資料に基づいて整理した。このような広い範囲を統一的に分析した先行研究はロシアにもなく、論文提出者の長期にわたる堅実な野外調査の蓄積にその多くを負っている。つづく第Ⅱ部第 1〜3 章では、前 1 千年紀後半から後 2 千年紀前半にかけて環オホーツク海沿岸に展開したオホーツク文化に焦点をあて、この文化が実際には、起源と系統を異にする多くの考古学的諸文化の集合によって成立していることを明らかにしている。オホーツク文化は、道東・道北の沿岸地帯とサハリンに分布することで我が国では戦前から注目され、調査・研究の蓄積があるが、その主体がロシア側の環オホーツク海地域にあることから、近年までその実態は茫漠としていた。ロシア人でありながら、この文化の研究のため日本に長く留学した論文提出者の長期にわたる研究により、日本とロシア相互の研究を初めて同等に比較検討することが可能となった。

本論文が対象とする地域は、多様な自然環境を有し、さらに日本および中国といった政治的中心の周縁にあったため、複雑な歴史的変遷過程を辿っている。これまでの先行研究では文献研究を中心としていたため、その様相は不明瞭であったが、論文提出者は、アムール中・上流域に展開していた中世の文化群にその影響を見て取っている(同第 4 章)。

以上の見取り図の整備に基づいて、第Ⅲ部では、これら諸文化の形成・変容プロセスを、民族学・人類学・言語学・地理学等の知見を加えて説明を試みた。当該地域は、自然環境と地理的・地形的要因に規定されるため、農耕の北限地帯に相当する一方、内陸での狩猟、沿岸部・大河川流域での水産資源利用に特色を有する。そのため民族集団の移動には、複雑な生業転換が予想される。また自然環境の異なるシベリアに系統を有するトナカイ飼養・利用の影響も重要である。現在の少数民族に連なるエスニック・プロセスを加味したシナリオには、資料の絶対的不足に起因する異論も想定されうるが、全体的には現段階では整合的かつ意欲的な仮説の提示と評することができる。少なくとも、これほど広大な地域における長大な時間軸上の文化動態を、具体的な資料操作に基づい

て総合的に議論した研究は初めてである。

一方そのため、文化の関係性の検討にやや性急な議論が見られること、集団移動の根拠とされた気候変動に関するデータの提示に乏しいこと等、不満を感じさせる部分もなくはないが、本論文の意義を損なうほどのものではない。論文提出者の将来の研鑽に期待したい。

なお、本論文の第Ⅰ部第 3 章および第Ⅱ部第 2 章における現地調査の一部には、福田正宏・臼杵勲・熊木俊朗・佐藤宏之等との日露共同調査によるものを含んでいるが、当該部分は論文提出者が主体となって独自の分析および検証を行ったもので、論文提出者の寄与が十分であると判断する。

したがって本委員会は、博士(環境学)の学位を授与するにふさわしいと認めるものである。